レッシングにおける真理探求の問題

安酸　敏眞

序

「人間の価値は、誰かある人が所有している真理、あるいは所有していると思っている真理にではなく、真理に到達するためにその人が払った誠実な努力にある。というのも、人間の力は、所有によってではなく、真理の探求によって増すからであり、人間の完全性が絶えず成長するのは、ひとえに真理のかかる探求によるからである。所有は沈滞させ、怠惰にし、傲慢にする――

もしも神が右手に一切の真理を、左手に真理を探求せんとするただ一つの常に生き生きとした衝動を握り給い、わたしに《選べ》と言われるとしたら、たとえ後者には不断にまた永久に迷わすであろうという仰せ言が付け加えられていようとも、わたしは慎ましく神の左手にすがり、《父よ、これを与えたまえ。純粋の真理はひとえにあなたのみのものなれば》と言うであろう。」[1]

レッシングのこの有名な言葉（以下Lessingswortと呼ぶことにする）は、思想家としての彼の真髄を見事に表明しているが、教理史家のK・バイシュラークは、レッシングのこの言葉の背後に、アレクサンドリアのクレメンスの『ストロマテイス（雑録）』（四・一三六・五）の以下のような言葉が潜んでいる可能性を示唆している。

「もしある人が覚智者に神のグノーシスと永遠の救いとがかりに区別されるものとして（実際には全く同じものであるが）、どちらを選びたいか、と尋ねると仮定するならば、覚智者はいささかも躊躇することなく神のグノーシスを選ぶであろう。信から愛を通ってグノーシスへと昇っていった、［信の］変らない特質はそれ自身のゆえに選ばれて然るべきであると信じているからである」[2]。

彼の神学的・宗教哲学的著作が示しているように、専門家顔負けの教父学の知識を身につけていたレッシングだけに、彼が『ストロマテイス（雑録）』におけるクレメンスの言葉を知悉しており、それを雛形にしてLessingswortを生みだした可能性もたしかに否定しきれない。しかし、万が一それが事実であるとしても、レッシング的実存の思想的表明ともいうべきLessingswortは、信（ピステイス）と知（グノーシス）という二項的図式に基づいて「神のグノーシス」と「永遠の救い」の二者択一を仮想するクレメンスの古代的思考とは、本質的に異なっていると言わざるを得ない。クレメンスとレッシングの相違は、両者の思想家としての気質の相違に帰因しているだけでなく、それぞれの思想史的境位とも深く関係していると思われるが、いずれにせよバイシュラークの示唆は、Lessingswortの歴史的背景とその特質を究明する課題へとわれわれを駆り立てる。そこで本稿においては、レッシングにおける真理概念と真理探求のモチーフについて、少し掘り下げた考察をしてみたい。

一

Lessingswortの遠景としては、アレクサンドリアのクレメンスよりもさらに古く、たとえば『ニコマコス倫理学』

におけるアリストテレスの言説、つまり人間の善さ（ἀγαθόν）は、活動の結果いかんにかかわらず、魂の活動（ἐνέργεια）として器量（ἀρετή）によって生まれてくるという言説、を挙げることも不可能ではないかもしれない。[3] しかし何といってもその直接的な先蹤としてあるのは、「われわれの幸福は完全な享受（une pleine jouissance）にはないであろうし、あるべきでもない。そんな状態では、もはや何も望まなくなり、われわれの精神は愚鈍になってしまうだろう。われわれの幸福は新たな喜びと新たな完全性への不断の前進（un progrès perpetuel à de nouveaux plaisirs et de nouvelles perfections）にあるのである」[4] というライプニッツの言葉であろう。その表現や思想内容からして、Lessingswort の前段はライプニッツのこの言葉の翻案に他ならないといっても過言ではないほどである。それゆえ、Lessingswort と呼ばれているものは、実際には、ライプニッツに範を取った前段と、クレメンスに範を取った後段との結合の産物であるとの見方も、ひょっとしたら成り立つかもしれない（しかし、われわれの考察がやがて示すように、このような見方はいささか表面的に過ぎるであろう）。

ともあれ、上記のような思想史的背景を背負った Lessingswort は、類似した他のいかなる言葉にもまして、後代に深い感銘を与え続けてきた。例えば、「ひとつの目標を達成しようと努め、かかる目標を身体的ならびに道徳的な力をつぎこんで獲得すること、このことに元気で力溢れる人間の幸福は基づいている。張りつめた力を休息に明け渡してしまう所有は、錯覚的幻想においてのみひとを魅了するものである」[5] というヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言葉や、「経験したことの成果ではなく、経験そのものが目的である」（Not the fruit of experience, but experience itself, is the end）[6] というウォルター・ペイターの言葉などは、Lessingswort の影響を色濃く反映したものであるといえよう。さらに、ゲーテの不朽の名作『ファウスト』とてもその例外ではない。Lessingswort の典拠たる『再答弁』*Eine*

Duplik (1778) が出版されたとき、ゲーテの『原ファウスト』*Urfaust* はすでに出来上がっていたが、それはいまだ天上の序曲、ファウストとメフィストーフェレスとの契約、あるいはファウストが最終的に救われるシーンなどを含んではいなかった。しかし真理の所有よりも不断の真理探求を尊ぶレッシングの言葉を知ったゲーテは、おそらくLessingswort から受けた強烈な印象を自らの作品の中に反映させて、最高傑作『ファウスト』を完成させたのである。[7]「人間は努力をするかぎり迷うものだ」(Es irrt der Mensch, solang' er strebt)[8] という「天上の序曲」における主の言葉や、「絶えず努め励むものをわれらは救うことができる」(Wer immer strebend sich bemüht, Den können wir erlösen)[9] という第二部の最終シーンにおける天使たちの合唱の言葉の中に、Lessingswort の影響を端的に読み取ることができるであろう。それだけではなく、ファウストがメフィストーフェレスと契約を結ぶくだりでの、「もしわたしがのんびりと寝椅子に手足でも伸ばしたら、そのときは私ももうおしまいだ」[10] というファウストの言葉も、Lessingswort の趣旨によく合致している。

このように、レッシングにおける不断の真理探求というモチーフは、後世に大きな感化を及ぼしているが、このような真理探求のモチーフを成り立たしめているレッシングの真理概念とは、一体いかなるものなのであろうか。

二

「真理探求者」(Wahrheitssucher) ならびに「真理愛好者」(Liebhaber der Wahrheit) として名高いレッシングだけに、「真理」(Wahrheit) という言葉は彼の著作に頻出する。しかし真理概念についての明確な定義、ないしそれに近

いものを求めて、彼の膨大な著作を渉猟してみても、彼の真理概念を端的に表明している用例を取り出すことは困難である。なぜならその用例はきわめて多彩であり、“die Wahrheit sagen”や“in Wahrheit”のような単なる慣用句的用法にはじまり、「ほんとうのこと」、「あからさまなこと」といった程度の意味での用法、そして美学的概念、倫理的概念、宗教的概念、形而上学的概念としての真理概念など、さらには「三つの指環の譬喩」のようにお伽噺(メルヒェン)の形態をとって暗示的に語られたものにいたるまで、実に多種多様な用法が見いだされるからである。[11] それにもかかわらず、夥しい数の用例全体の根底に潜むレッシング特有の真理概念を感受することは決して不可能ではない。

レッシングはアンドレアス・ヴィソワティウス（Andreas Wissowatius, 1608–1678）についての論評において、「神が、神のみが、そして彼ご自身のみが、世界を造られたのであり、……最も完全な被造物といえども世界の一部であらざるを得ず、神と比較すれば最も惨めな蛆虫のようなもので、世界の考慮に値する一部ではあり得ないという真理」がヴィソワティウスにとっての「唯一の真理」[12]であったと述べているが、このことはほぼそのままレッシング自身にもあてはまる。レッシングにとっても、神は「あらゆる真理の永遠の源」（ewige Quelle aller Wahrheit）[13]であり、人間と世界に関するあらゆる真理は創造主としての神に発源している。神によって創造されたわれわれ人間にとって、真理は宇宙の根本道理として、生の規範ならびに目標として、最高の価値を意味している。最初期の断片『宗教』*Die Religion* (1749/50) において、弱冠二十歳のレッシングは、「けれども、おそらくわれわれの精神は、それだけますます神的なものなのである。われわれはおそらく真理のために造られたのである。なぜなら、われわれは美徳のために造られてはないからである」[14]と述べて、真理と人間存在との関係を逆説的命題として提起している。すなわち、われわれが現実の人間関係において見いだすものは、もっぱら嘘、誤謬、欺瞞といった様々な悪徳であり、人間が真理の

ために生きていないというのは、ほとんど動かし難い事実である。「真理のため？ 真理とは何と多様であろうか？ 各人は真理を所有していると信じているが、しかし各人は異なった仕方で真理を所有している。否、誤謬のみがわれわれの持ち分であり、われわれの学問は妄想である」[15]という彼の言葉は、人間が真理のために造られたという命題を真っ向から打ち消すかのようである。しかしレッシングは、それにもかかわらず、否、むしろだからこそ、真理は人間にとって稀少の最高価値なのであり、それのために生きるのが人間の最高の美徳となる、と言おうとしている。

同じく最初期の喜劇『自由思想家』*Der Freigeist* (1749) において、レッシングは「真理など存在しないか、それとも真理は大半のひとによって、それどころかすべてのひとによって、少なくとも本質的な点において感得されることができるか、そのいずれかでなければならない」という敬虔かつ真摯なユリアーネの主張に対して、自由思想家のアドラストに「そうなり得ないとしても、それは真理のせいではなく人間のせいである。――われわれはこの世で幸福に暮らすべきである。そのためにわれわれは造られているのであって、ただそのためにだけわれわれは造られているのである。真理がこの偉大な究極目的にとって妨げとなるたびに、ひとは真理をなおざりにしなければならない。なぜなら、真理そのもののうちに自らの幸福を見いだすことができるのは、ごく少数のひとかどの人物だけだからである。それゆえ誤謬は下衆（げす）にまかせておけばよい。なぜ誤謬を彼らにまかせておけばよいかといえば、誤謬は彼らの幸福の基礎であり、彼らが安全や繁栄や喜びをそこに見いだす国家の支柱だからである」[16]という趣旨の反論を展開させている。ここでレッシングは、『宗教』において表明した真理と人間存在との逆説的関係を、いわば二極分化した二つの命題に仕立てて、二人の登場人物の口を借りて言い表しているのである。

このように真理は人間といわば逆説的ないし弁証法的な関係に立っているが、しかしそのようなものとして、「真

理は魂にとって必然的である」。[17] 真理探求は魂の本質的営みなのであって、この真理探求の営みとしての学問に対しては、法律といえども教権をふるってはならない。「なぜなら学問の究極目的は真理だからである」。それゆえ、「こうした本質的な欲求を満たすにあたって、魂にいささかでも強制を加えるならば、それは暴政となる。」[18]

三

レッシングは、真理探求にあたってひとり一人が「自分自身で熟考すること」(das eigene Nachdenken) の大切さを強調する。例えば彼は、ヴィーラント (Christoph Martin Wieland, 1733–1813) を論評した文芸書簡において、以下のように述べている。

「人間の魂を訓練によって完全なものにする最大の秘訣は、――ヴィーラントはそれを名ばかりしか知らなかったが――、ひとえに次の点に存している。すなわち、ひとは自分自身で熟考することを通して真理に到達しようと不断に努力することにおいて (in steter Bemühung ..., durch eigenes Nachdenken auf die Wahrheit zu kommen)、人間としての魂を得るのである。そのための原動力は功名心と好奇心である。そしてその報酬は真理を認識する際に覚える喜びである。しかし、もし若者に歴史的知識を最初から即座に教示すれば、若者の心を眠り込ませることになる。つまり、好奇心は早くから沈静化され、そして自分自身で熟考することを通して真理を見いだす道 (der Weg, durch eignes Nachdenken Wahrheiten zu finden) が、突然閉ざされることになる。われわれは本性的に《なぜ》よりも《いかに》をはるかに知りたがる。いまこの二通りの認識の仕方を分離することにわれわれを不幸な仕方で慣れさせたとしよ

う。あらゆる出来事において原因について考え、結果に照らして各々の原因を推定し、そして両者の正しい関係から真理を導き出すよう手ほどきしなかったとしよう。そうすればわれわれは無関心というまどろみに陥って、そのまどろみから目覚めるのがとても遅いことだろう。真理そのものはわれわれの目にはあらゆるその刺激的魅力を失い、そうなればわれわれは、例えば成熟した年頃になっても、自然と心が駆り立てられて認識済みの真理の原因を究明するようなことをしなくなる。」[19]

ここに詳しく引用したレッシングの言説は、『最近文学に関する書簡』*Briefe, die neueste Literatur betreffend* の一七五九年一月号に掲載されたものであるので、『再答弁』における Lessingswort よりも丸十九年古いものであるが、ここに示された彼の見解は Lessingswort の趣旨と非常によく合致している。それゆえ、これは Lessingswort のいわば古層を形づくるものである。ところで、「自分自身で熟考することを通して真理に到達しようと不断に努力する」とか、「自分自身で熟考することを通して真理を見いだす」といった真理探求のモチーフは、これよりもさらに溯ること丸十年、キリスト教信仰からの逸脱をなじる牧師の父に対して書き送った一七四九年五月三十日付けの手紙のなかに、すでに驚くべき明瞭さで打ち出されている。弱冠二十歳の「自由著作家」のレッシングは、以下のような注目すべき言葉で自分自身の生き方を弁護している。

「キリスト教教理の原則を覚えこみ、しばしばそれを理解もせずに唱え、教会に通い、あらゆるしきたりを、ただそれが慣行になっているからとの理由でともにする人間がよりよきキリスト教徒であるのか、あるいは、ひとたび賢明に疑い、探求の道を辿って初めて確信に達した人間、ないしは達しようと少なくとも努力している人間がよりよきキリスト教徒であるのか、それは時が来れば分かることです。キリスト教は両親からそっくり鵜呑みにして受け取ら

れるべきものではありません。なるほど大抵の人間は、財産を相続するのと同じようにキリスト教をも両親から相続しますが、彼らはまた行状によってどのように立派なキリスト教徒であるかを証明するのです。わたしとしては、キリスト教の最も重要な戒めの一つ、『汝の敵を愛せよ』がよりよく遵守されぬ限り、キリスト教徒を自称する者たちが果たしてそうであるかを疑います。」[20]

ここに見いだされる、「ひとたび賢明に疑い、探求の道を辿って初めて確信に達した人間、ないしは達しようと少なくとも努力している人間」(der, der einmal klüglich zweifelt hat, und durch den Weg der Untersuchung zur Überzeugung gelangt ist, oder sich wenigstens noch darzu zu gelangen bestrebet) というこの表現こそは、Lessingswort の最古層を形づくるものであるといってもよいが、これはレッシングがライプニッツや古代教父の思想を本格的に学ぶはるか以前に記されたものである。したがってLessingswortは、ライプニッツやクレメンスの言葉の翻案であるというよりは、むしろレッシング自身の実存に深く根ざしたレッシング固有のものである、と断定してほぼ間違いないであろう。

しかもわれわれにとって重要なことは、レッシングがこのような「探求の道を辿って確信に到達」しようとする努力、ないし「自分自身で熟考することを通して真理に到達」しようとする不断の努力を、ルターの宗教改革の精神と結びつけて理解していることである。曰く、「真のルター主義者は、ルターの著述にではなく、ルターの精神によりどころを求めようと欲する。そしてルターの精神は、いかなる人も、真理の認識において、彼独自の判断にしたがって (nach seinem eigenen Gutdünken) 進むのを妨げられてはならないということを断固として要求する。」[21] このようなルター理解が正当であるかどうかは別問題として、ここにはレッシングによるプロテスタント原理の意義深い近代的解釈がある。

四

さて、Lessingswort の顕著な特徴は、真理の所有よりも真理の探求をより尊しとする点にのみあるのではない。ゲーテが文学的天才をもって『ファウスト』の中に取り込んだように、「たとえ後者には不断にまた永久に迷わすであろうという仰せ言が付け加えられていようとも」(obschon mit dem Zusatze, mich immer und ewig zu irren) という「仰せ言」の部分もきわめて重要である。真理探求に試行錯誤はつきものである。「真理はそのように［感傷主義の作者が考えるように］われわれの感情の陶酔状態においてすばやく捉えることのできるものではない。」[22] レッシングは、われわれが真理探求の途上において犯す間違い (Fehler) や誤謬 (Irrtum) を、注目すべき仕方で積極的に評価している。「わたしは自分が真理をとらえそこねたときにこそ、真理に大きく貢献したのであると考える。そしてわたしの間違いは、まるでわたし自身が真理を発見するかの如くに、他の人が真理を発見するきっかけとなるのである。」[23] あるいはまた、真理に対するわれわれの証明の仕方の出来不出来も問題ではない。「たとえ証明のされ方がまずくても、真理はどこまでも真理である。そして真理に対するまずい証明の仕方を非難する人は、だからといって真理そのものを非難したことにはならない。」[24] 大事なことは真理を愛し、真理か非真理かということにつねに深い関心をもつことである。曰く、「そして最も些細な事において真理か非真理かについて無関心な人は、自分がただ真理のためにのみ真理を愛しているということをわたしに説得することなど決してできないであろう。」[25]

レッシングは真理が真理として顕現するために、真理をめぐる「論争」(Streit) の意義を高く評価してやまない。論争は真理の益にならないと考える面々に向かって、レッシングは次のように主張する。「しかし、真理がそれで利

益を得ることはきわめてまれである、とひとはいう。――きわめてまれ？ 論争によって真理に決着がついたことはまだないとしても、にもかかわらず真理はあらゆる論争において利益を得てきた。論争は、検証の精神を培い、先入見と外見とを絶えざる動揺のうちにおいてきた。要するに、論争は粉飾された非真理が真理の位置に定着するのを妨げてきた。」[26] レッシングがライマールスの遺稿の一部を「無名氏の断片」として公刊して、いわゆる「断片論争」(Fragmentenstreit) に火をつけた行為も、ここから理解できるものとなる。

レッシングは「無名氏の断片」に対する「編集者の反論」においてこのように言う。「まことに、そのような人がそのうちに現れるべきである。両方の側でそのうちに現れるべきである。対象の重要性と尊厳性とが要求する通りに宗教を論駁する人と、そしてその通りに宗教を擁護する人とが。あらゆる知識と、あらゆる真理愛と、あらゆる真剣さをもって！」。[27] そしてライマールスを「宗教の真正なる論駁者の理想」にきわめて接近した人物と見なす彼は、「無名氏の断片」が「宗教の真正の擁護者の理想にただもう全く同じくらい接近しているような人」を覚醒してくれることを期待する。[28] つまりレッシングは、十八世紀に表面化した正統主義と啓蒙主義の対立を、「ネオロギー」(Neologie) のように安易に調停するのではなく、むしろその対立点を論戦によってより先鋭化させ、かかる仕方で硬直化した神学状況を流動化し活性化させようとしたのである。それゆえ「無名氏の断片」を公刊したことは、レッシングにとってはすぐれて真理探求の行為であった。つまり彼は神学論争を通じてキリスト教的真理のより深い認識に至ろうと欲したのである。

五

それでは、真理をめぐる論争において、ひとはどのように振る舞うべきであろうか。これに関してレッシングは、民事訴訟と学問論争との相違を引き合いに出しながら、実に彼らしい見解を表明しているので、まずそれを見ておくことにしよう。

「それゆえ、とりわけわたしはこのように問う。真理を探求するにあたって、論敵の無知を利用することは許されるかどうかと。民事訴訟においては、自分自身に不利な証拠を敵の手にゆだねる必要はないことを、わたしはよく承知している。そのような証拠がなければ、敵はすぐに敗訴せざるを得ないであろうから。何でもかんでも明々白々な仕方で確実に反駁できる当てがないのに、もし自分自身に不利な証拠を敵の手にゆだねようものなら、むしろ血迷ったと見なされるのが落ちだろう。しかしなぜだろうか？ なぜなら、彼の敗北は必然的に他方の側の勝利と結びついているからである。そしてなぜなら、ひとが裁判官に要求することができるものは、裁判官がその判決でもって、最も多くの正しさを有していると思われる者の側に立つことだけだからである。しかし、真理を非難材料とする論争においては、こうしたことは起こらない。なるほどひとは真理をめぐって争うが、しかし勝利して真理を手にするのが、一方の側であれ他方の側であれ、いずれにしても決して自分自身のために真理を手にするのではない。負ける側は誤謬以外の何ものも失わない。そしてあらゆる瞬間に他方の側の勝利に分け前を与えることができる。それゆえ誠実さ(Aufrichtigkeit)こそはわたしが哲学者に要求する第一要件である。哲学者たるものはいかなる命題であれ、ある命題が自分の体系よりも他者の体系により多く合致するとの理由で、それをわたしに黙秘してはならない。そして彼は、

全力をもってせずともそれに答えることができるからとの理由で、わたしに反論を黙秘してはならない。そんなことをしようものなら、彼が真理でもって利己的な商いをし、真理を非欺瞞性という狭い境界に閉じこめようとしていることは明白である。」[29]

ここには、論争の勝ち負けそのものを越えて、論争を通じて真理のより深い認識に至ることができるという、レッシングの強い信念がよく示されている。つまり、いずれの側が勝利するにせよ、論争においては真理が誤謬に対して勝利するのであって、したがって論争は真理に裨益するところ大なのである。実際、ゲッツェ（Johann Melchior Goeze, 1717–1786）との熾烈な神学論争の渦中にあって、レッシングは真理に対する自らの強い信頼の念を吐露しながら、ルター派正統主義の異端審問官のような彼に向かって以下のように述べている。

「われわれがいかに書くかはさほど重大ではないが、いかに考えるかは大いに重大である。それにもかかわらず、ひょっとしたらあなたは次のように主張するおつもりではなかろうか。すなわち、婉曲的で比喩に富んだ言葉には、必然的に不確かで間違った意味が存せざるを得ないと。最も本来的で、最も普通で、最も平板な表現を用いる人以外は、誰も正確にはっきりとものを考えることができないと。冷静な象徴的な思想に何らかの仕方で自然的表号の温かさと生命をもった何かを賦与しようとすれば、必ず真理に害になると。

傷の深さを鋭利な刀のせいにしないで、ピカピカ光る刀のせいにするのは、どんなにか滑稽な業であろう！ したがってまた、真理がわれわれにまさる優越を敵に与えているのに、それをこの敵の素晴らしい様式のせいにするのは、何と笑止千万なことだろう！ わたしは、その光輝を多かれ少なかれ真理から借用していないような、いかなる素晴らしい様式も知らない。真理のみが真正の光輝を与えるのである。そして揶揄や冗談にあっても、真理は少なくとも

引立て役として、その基礎になっているに相違ないのである。

それゆえ、それについて、つまり真理について、われわれに語らせなさい。様式についてではなく」[30]。

六

このように、誤謬に対する真理の力を信じて疑わないレッシングではあったが、政治的にも教会的にも後ろ盾をもたず、自分のペンだけを頼りに生きるレッシングにとって、政治的ないし教会的権力をバックにもった論敵との論争は決して容易であったはずがない。「戦術家」(Taktiker) として超一流の冴えをみせた彼は、ときには敵の眼を欺くために、巧みに同盟者のふりをすることも皆無ではなかった。あるいは自己に萌した新しい真理の認識[31]をストレートに表現するには時期尚早と判断して、謎めいた言い回しを用いてぼかしたり、ときにはそれを完全に秘匿するのが得策と考えた場合もあった。

なるほどレッシングは、『ツールのベーレンガル』*Berengarius Turonensis* (1770) において、中途半端な真理の説き方を諫める以下のような発言を行なっている。

「幸福と生命を真理のために犠牲にすることが義務であるかどうか、わたしにはわからない。少なくともそのために必要な勇気と決然たる態度は、われわれが自分自身に与えることができる天分ではない。しかしわたしも承知の通り、もしひとが真理を説こうとする場合、真理を完全に説くか、さもなくば全然説かないこと、つまり明瞭にきっぱりと、謎めいた言い方を用いず、遠慮がちな態度をせず、その力と効用に不信感を抱かずに真理を説くことは義務で

ある。そしてそのために要求される天分はわれわれの意のままになる。このような天分を獲得しない人、あるいは獲得してもそれを用いようとしない人は、もしその人がひどい誤謬をわれわれから取り去りつつも、全き真理を隠し立てし、そして真理とも嘘ともどっちともつかないものでわれわれを満足させようとすれば、人間悟性にまずい仕方でしか貢献しない。なぜなら、誤謬がひどければひどいほど、それだけますます真理へといたる道は近くかつ直いからである。これに対して、洗練された誤謬は、それが誤謬であることがわれわれにわかりにくければわかりにくいほど、永遠にわれわれを真理から遠ざけておくことができる。」[32]

しかしレッシングは、ベーレンガル（Berengar von Tours, *ca.* 1005–1088）が置かれていた歴史的状況を考慮して、以下のような言葉で彼をかばっている。「ベーレンガルは弱かったので、それだから彼はまた故意に間違っていざるを得なかったのだろうか？ 身に迫った危険のために真理に不誠実となる人であっても、真理を非常に愛することはできる。そして真理は彼の愛ゆえに彼の不誠実を赦す。しかし種々な仮面をかぶせ化粧を施しながら真理を人々にもたらすことばかり考える人は、真理の取り持ち（Kuppler）になりたいとは思うであろうが、ただし真理の愛好者（Liebhaber）であったためしはない。そのような真理の取り持ちよりも悪いものをわたしはほとんど知らない。」[33]

このようにレッシングは、純粋な真理愛にもかかわらず外的状況によって余儀なくされる真理に対する表向きの不誠実と、所有している既成真理の上に胡座をかきそれへの取り持ちに終始する単なる真理の標榜とをはっきりと区別し、後者よりもはるかに前者を高く評価している。たとえ間違いや錯誤はあろうとも、真理の探求は真理の所有に優るという精神はここでも脈打っている。いずれにせよ、レッシングがときおり見せる、真理（Wahrheit）のための闘

争においてはときに人間的誠実さ（Wahrhaftigkeit）を欠くこともやむなしとの態度は、多分にその都度の政治力学的状況についての、彼一流の現実主義的な判断に基づいている。よく引用される彼の言葉で言えば、「わたしは自分の武器を自分の敵に向けなければならない」のであり、それゆえ「わたしは自分が演習風に（γυμναστικῶς）書くすべてのことをまた教理的なものとして（δογματικῶς）も書くとは限らない」[34]のである。

しかし、レッシング研究者によってしばしば指摘される、彼における「公教的教説」（Exoterik）と「秘教的教説」（Esoterik）という問題性は、単に上記のような現実主義的な状況判断によるだけではない。そこには「中間時」（Interim）としての歴史に対する深い自覚と、自らの知の限界をわきまえた「知恵」（Weisheit）の立場とが深く関与している。レッシングは『エルンストとファルク』*Ernst und Falk* (1780) において、フリーメーソンの開悟者ファルクの口を通して、「黙っていたほうがよい真理」（Wahrheiten, die man besser verschweigt）もあると言い、「賢者は黙っていたほうがよいことについては語ることができない」（Der Weise *kann* nicht sagen, was er besser verschweigt）[35]と述べているが、この言葉はレッシングにおける「中間時」と「知恵」の問題を解明してはじめて、その深い意味で理解できるものであろう。[36]

七

レッシングにおける「中間時」と「知恵」の問題を考察する上で重要と思われるのは、『賢者ナータン』*Nathan der Weise* (1779) における有名な「三つの指環の譬喩」（die Ringparabel）であるが、そこでは中間時における真理性の問

題が問われている。[37]

「三つの指環の譬喩」の全体の枠組みとしては、始源から終末へと向かう聖書的な歴史観が前提されている。すなわち、「遠い昔に」(vor grauen Jahren)、東方の国に住む一人の男が「計りしれない値打ちをもった指環」を神から直接(「大事な方の手から」)授かるが、神的由来のこの指環が物語の発端を形づくっている。この指環には「秘密の力」が具わっており、その力を堅く信じてその指環を嵌めている者を「神と人とに好まれるものにする」という。しかし長い長い時間の経過とともにやがて混乱が生じてくる。本来一つしか存在しないはずなのに、実際には本物を名乗る指環が三つも存在することが判明する。この容認しがたい現実に直面した三つの指環の所有者は、めいめいが自分の指環の真正性を主張して譲らず、遂にはそれぞれが他の二者を相手取って訴訟を起こすにいたる。かくして事件は法廷の場に持ち出されるが、ここでも問題は決着を見ない。「慎み深い裁判官」は、問題の最終的解決を「数千年後のそのとき」(über tausend tausend Jahre)同じ席に坐るであろう「より賢明な裁判官」(ein weisrer Mann)の手に委ねる。つまり、いずれが本物であるかは歴史の終末を待たなければわからないというのである。

ところで、始源から終末へと向かうこのような歴史の構図のなかで、現在はいわばその中間に位置する《中間時》である。歴史の始源においては、神に由来する本物の指環は一つだけで、まだ混乱と紛争は存在しない。歴史の終末においては、それまでの混乱と紛争に終止符が打たれ、三つの指環のうちどれが本物であるかが判明する。このように始源と終末はいずれも単一性と統一性によって特徴づけられるとすれば、歴史の中間時は数多性と分裂性をその基本的特徴としている。ここにおいては、すべてのものは一義的に明白ではなく、玉石混淆のために両義的ないし多義的である。したがって歴史の中間時においては、物事を一刀両断に捌いて白黒をはっきりさせることはできない。

実際、歴史の中間時に位置していることを自覚している「慎み深い裁判官」(der bescheidne Richter)は、指環の真贋に関する「謎を解く」ことを最初から断念している。彼は自分の眼識の及ぶ範囲、いわば理性の限界をよくわきまえている。彼にはせいぜい忠告を与えることしかできない。しかしどうしても歴史のうちで暫定的裁定を下す必要があるとすれば、指環そのものに具わっている「不思議な力」に判定の基準が求められなければならないという。[38] つまり本物の指環ならその所有者を神と人とに好まれる者にする不思議な力を具えているはずであるので、このことが判決を下さねばならないという。ところがこのような基準に照らしてみると、互いに言い争っている三人の息子は、指環に具わる不思議な力を裏切っていることが判明する。いずれも利己的な愛に生きており、指環の力は発揮されていないからである。

はたして、このようなジレンマを打開する方法はあるだろうか。「慎み深い裁判官」によれば、歴史の中間時に生きるわれわれに残されている唯一の方法は、自らの宗教的・道徳的実践によって指環の真正性を自証するという方法である。そこでこの慎み深くも賢明な裁判官はこう忠告する。「お前達はこの事態をあるがままに受け取るがよい。めいめいが父親から指環を授かったのなら、自分の指環こそ本物だと信ずるがよい。……さあ! それぞれが、父親の、偏見のない公正な愛を見習うがよい! めいめいが自分の指環に鏤(ちりば)めてある石の力を顕示するように励み合うがよい!——そして柔和な気持ち、心優しい協調性、善行、神への心からなる帰依をもって、石がその力を発揮できるように助勢するのだ!」どの指環が本物であるかを客観的に証明する術がない以上、めいめいが父親から譲り受けた指環が本物であることを信じて、その指環の不思議な力が自ずから発現するように、ひたすら愛の実践に励むしかないというのである。

「三つの指環の譬喩」は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教のうちどれが真の宗教であるかという、サラディンの難問をかわすために案出されたものであったが、レッシングはこの譬喩を通して、歴史的宗教の真理性は客観的には証明され得ないということを示唆している。「どれが本物の信仰であるかは、いまのわれわれには証明できない」。このようにレッシングによれば、歴史の中間時においては、すべてのものは両義的ないし多義的である。それゆえ、「真理は一つ以上の形姿で働く」(Die Wahrheit rühret unter mehr als einer Gestalt)[48]ということにならざるを得ない。だがこれを裏返せば、歴史的真理はすべて部分的かつ制約的なものにとどまり、部分的にはまた非真理を含んでいるということである。レッシングはこういう洞察を側面から支える目的で、『人類の教育』*Die Erziehung des Menschengeschlechts* (1780) の冒頭に、「コレラスベテノコトハ、或ル点ニオイテ偽デアルトイウ理由ニヨリ、或ル点ニオイテハ真デアル」(Haec omnia inde esse in quibusdam vera, unde in quibusdam falsa sunt) というアウグスティヌスの言葉を引いている。[49]

むすび

以上、われわれはレッシングにおける真理探求の問題を考察してきたが、これによってLessingswortが彼の思想の真髄を凝縮したものであることが明らかになったことと思う。「各人は自分にとって真理と思えることを語ろう。そして真理そのものは神に委ねよう!」(Jeder sage, was ihm Wahrheit *dünkt*, und *die Wahrheit selbst* sei Gott empfohlen!)。[41] この言葉はLessingswortをさらに圧縮したものであるが、いずれにせよかかる精神に支えられたレッシング的真理探

求は、今日ますますその価値を増していると言えるであろう。

注

(1) LM 13, 23–24; G 8, 32–33 (Eine Duplik).

(2) 筆者は、水垣　渉『宗教的探求の問題』(創文社、一九八四年)、四九頁を通してこのことを知ったが、そこでも述べられているように、クレメンスのこの言葉とレッシングの言葉との類似性と相違を最初に指摘したのは、バイシュラークである。*See* Karlmann Beyschlag, *Evangelium als Schicksal: Fünf Studien zur Geschichte der Alten Kirche* (München: Claudius Verlag, 1979), S. 45 u. 137 Anm. 29. なお、ここで引用したクレメンスの言葉に関しては、上掲書における水垣訳をそのまま借用させていただいた。

(3) 『アリストテレス全集』第一三巻(岩波書店、一九七三年)、一八一二五頁参照。

(4) Gottfried Wilhelm Leibniz, *Principes de la Nature et de la Grace,* in *Die philosophischen Schriften,* hrsg. v. C. I. Gerhardt, Bd. VI (Hildesheim: Georg Olms, 1961), S. 606. 訳文は『ライプニッツ著作集』第九巻(工作舎、一九八九年)の米山優訳を借用。

(5) Wilhelm von Humboldt, *Ideen zu einem Versuch, die Grenzen der Wirksamkeit des Staates zu bestimmen,* in *Werke,* hrsg. v. Albert Leitzmann, Bd. 1 (Berlin, 1903; Neudruck, Darmstadt; Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1980), S. 57.

(6) Walter Pater, *The Renaissance: Studies in Art and Poetry,* Library Edition (London, 1910), p. 236. なお、ペイターのこの言葉と Lessingswort との関係については、以下の論文から教示を受けた。H. B. Nisbet, "Lessing and the Search for Truth," *Publications of the English Goethe Society* XLIII (1972–73): 72–95; here 74.

(7) *See* Walter Kaufmann, *Discovering the Mind: Goethe, Kant, and Hegel* (New York: McGraw-Hill Book Company, 1980), pp. 65–69.

(8) Johann Wolfgang von Goethe, *Faust,* in *Goethes Werke* (Hamburger Ausgabe in 14 Bänden), Bd. 3, hrsg. v. Erich Trunz (Hamburg: Christian Wegner Verlag, 1949; Neudruck, München: Verlag C. H. Beck, 1993), S. 18.

(9) Ibid., S. 359.

(10) Ibid., S. 57.

(11) グリムのドイツ語辞典は"Wahrheit"の項において、二十回以上にわたってレッシングの用例を引用している。*Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm,* bearbeitet von Dr. Karl von Bahder und Mitwirkung von Dr. Hermann Sickel, Bd. 27 (Leipzig: Verlag von S. Hirzel, 1922; Neudruck, München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1991), S. 839–911.

(12) LM 12, 94; G 7, 221 (Andreas Wissowatius).

(13) LM 13, 88; G 8, 99 (Eine Duplik).

(14) LM 1, 256; G 1, 171 (Die Religion).

(15) LM 1, 256; G 1, 171 (Die Religion).

(16) LM 2, 99; G 1, 527 (Die Freigeist, IV/3).

(17) LM 9, 13; G 6, 19 (Laokoon).

(18) Ibid.

(19) LM 8, 24; G 5, 53 (Literaturbriefe I, 11. Brief).（傍点著者）

(20) LM 17, 17–18 (An Johann Gottfried Lessing vom 30. Mai 1749); B 11/1, 26 (Brief Nr.21).

(21) LM 13, 143; G 8, 162 (Anti-Goeze, I).

(22) LM 8, 133; G 5, 171 (Literaturbriefe III, 49. Brief).

(23) LM 10, 419; G 6, 379 (Briefe, Antiquarischen Inhalts).

(24) LM 4, 382; G 3, 81–82 (Berlinische Privilegierte Zeitung, 1751).

(25) LM 11, 4; G 6, 407–408 (Wie die Alten den Tod gebildet).

(26) LM 11, 3; G 6, 407 (Wie die Alten den Tod gebildet).

(27) LM 12, 430; G 7, 459 (Gegensätze des Herausgebers).

(28) LM 12, 430; G 7, 460 (Gegensätze des Herausgebers).

(29) LM 5, 322; G 7, 21 (Rettung des Cardanus).

(30) LM 13, 149–151; G 8, 194–195 (Anti-Goeze, II).

(31) レッシングは『人類の教育』の序言において、自分は「今日のお決まりの道よりは幾分かすぐれたものを見渡すことができると信じているような高み」に立っていると述べているが、これはレッシングにおける新しい真理の認識を示唆するものである。LM 13, 415; G 8, 489 (Die Erziehung des Menschengeschlechts).

(32) LM 11, 69–70; G 7, 79-80 (Berengarius Turonensis).

(33) LM 11, 70; G 7, 80 (Berengarius Turonensis).

(34) LM 18, 266 (An Karl Lessing vom 16. März 1778); B 12, 131 (Brief Nr.1351).

(35) LM 13, 353; G 8, 459 (Ernst und Falk, II).

(36) レッシングにおける「知恵」の問題に関しては、拙著『レッシングとドイツ啓蒙』（創文社、一九九八年）第五章第五節の議論を参照されたい。

(37) この問題とは別に、レッシングにおける真理概念を考察する上で見逃せないのは、「三つの指環の譬喩」が語られる直前のシーンにおける「ナータンの独白」の内容である。そこでレッシングは真理をお金（貨幣）に見立てた議論を展

開しているが、マーク・シェルによれば、真理とお金（貨幣）とのこのような比較はきわめて重要な洞察を含んでいる。*See* Marc Shell, "What is Truth?: Lessing's Numismatics and Heidegger's Alchemy," in *Money, Language, and Thought: Literary and Philosophical Economies from the Medieval to the Modern Era* (Berkeley, Los Angeles, & London: University of California Press, 1982), pp. 156–177.

(38) レッシングが宗教の「内的真理」を強調するのもこのことと無関係ではない。

(39) LM 4, 277; G 3, 40 (Kritische Nachrichten, 1751).

(40) この点に関する詳しい考察については、拙著『レッシングとドイツ啓蒙』第六章の議論を参照されたい。

(41) LM 18, 269 (An Johann Albert Heinrich Reimarus vom 6. Apr. 1778); B 12, 144 (Brief Nr.1358).